

基礎編課題⑥

【名前：】

「主人公を取り巻く状況を丁寧に書く」ことを意識して、800文字程度で文章を書いてみましょう。
シチュエーション「次の授業に向けて学校の廊下を歩く」

「次の授業なんだっけ」

「理科。で、実験」

「げー、また教室移動？ 面倒なんだけど」

校庭を見渡せる渡り廊下を歩き、亜衣は大げさに伸びをする。それを律は後ろから呆れた目で見ていた。

「てか寒くね？ この渡り廊下なんで外にあるの」

「さあ」

律は適当に返事をする。すると後ろから騒がしい足音が聞こえてきた。

「律——！」

「うわっ！」

背後から抱きつかれ、律はバランスを崩す。持っていた美術の教科書が白い廊下に散らばった。

「あー、もう」

「うわわ！ ごめんね、律！」

「なーにやってんのよ。陽花里」

「えへへへ……」

律の教科書を拾う陽花里は気まずそうに笑う。どうやら自分でも思った以上に勢いが余ってしまったらしい。

他の生徒たちがチラチラと物珍しきに見てきて、律はさっと教科書を拾って何でもない風を装った。

「あ、ご、ごめんね。律」

「別にいいよ。で、どうしたの？ そんな走ってきて」

「う、うん。あのね、次の授業が実験じゃん。だから一緒に出来たらなー、なんて……」
抱きついてきた勢いとは裏腹に、しおしおと言葉の勢いがなくなっていく。

学校の実験は数人かのグループになって行われる。その組み分けは自由で、いわば『仲の良い人と組んでいいよ』ということだ。

コメントの追加 [na3]: なぜ呆れているのでしょうか？ 亜衣が面倒くさがっているからでしょうか？ 律の気持ちを補足できると良いです。

コメントの追加 [na4]: 新しいキャラクターの名前を自然に出せています。

コメントの追加 [na2]: 歩きながら

コメントの追加 [na1]: 誰と誰が話をしているのかわからず、読者はついていけなくなってしまいます。一文目・または「次の授業なんだっけ」の後にキャラクターの状況描写を入れたいです。

コメントの追加 [na5]: この「よく」は「誘われる」にかかります。あまり離れると読みにくくなってしま
うので、「この二人はよく友達から誘われる」または
「この二人は友達から組み分けによく誘われる」とす
るといいでしょう。

コメントの追加 [na6]: ここだけ律の心の声になって
います。「律はそう思った」などの描写の補足があると
良いです。

律は友達が多い訳ではないが、基本的に誰とでも話せる性格だ。それは亜衣も同じで
よくこの二人は友達から組み分けに誘われる。

けれど陽花里は違う。夏休み明けに転校してきた彼女は友達の輪が狭い。そのせいで
焦っているのか、他のクラスメイトとの距離感がいまいち掴めていない印象がある。

「律？」

陽花里が不安げな声を出す。断られることを恐れているのだろう。

律にとっては断る理由もない。それは隣でアイコンタクトをとった亜衣も同じだっ
た。

「いいよ。一緒に組も」

「よろしくねー。陽花里」

律と亜衣の返事を聞いた途端、ぱあっと陽花里の表情が明るくなる。

全く。女子というものは面倒くさい。

コメントの追加 [na1]: 誰と誰が話をしているのか分からず、読者はついていけなくなってしまいます。一文目または「は？ 誰に？」の後にキャラクターの状況描写を入れたいです。そうでないと、堀内と青葉どちらが告白されたかもわからないからです。

コメントの追加 [na3]: 告白を受けた側なので「返事」の方が適切です。

コメントの追加 [na4]: なんの大会なのか地の文で補足があると尚良いです。

コメントの追加 [na2]: 青葉が女性であることをはっきりさせる描写がほしいです。赤川の簡単な説明とともに、青葉の彼女に対する認識や感情を入れ込むと、自然と表現できると思います。

基礎編課題⑦

【名前：】

会話を中心にしつつ、キャラクターの魅力や状況が示せる800文字程度の文章を書きましよう。

シチュエーション「学校からの帰り道、二人の学生が歩きながら話す」

「ねえ、オレ告られた」

「は？ 誰に？」

「三組の赤川。ほら髪の毛、染めてるヤツ」

「ふーん」

橙色の夕焼けが横断歩道を彩る。信号が赤になると堀内と青葉は足を止めた。

「……で？ どうだったの」

青葉が訊く。あたかも何でもない風に。すると堀内は首を傾げた。

「どう、って？」

「だから……、結果」

「ああ」

車が走り出し、青葉のセミロングの髪が風で揺れる。赤、青、黒、白と、様々な車を目で追っていた堀内は口を開いた。

「断った。オレ大会あるから」

フツ、と心に息が吹きかかった感覚がして、青葉は思わず胸に手を当てる。早まっていた鼓動が落ち着いていくのが分かった。

「……そう」

「うん。で、何でそんなこと訊いたん？」

「べ、別にいいじゃん。ただの興味だし」

青葉はそっぽを向いて視線を逸らす。顔を覗かれそうになったのは危なかった。

「……ふーん」

すると途端に興味を無くしたのか、堀内はそれ以上にも訊いてこない。また道路を走る車を目で追いかけて始めた。

詮索されなかったのは良かったが、諦めが少し早いんじゃないか。青葉はそう思い、視線を戻そうとした時だった。

コメントの追加 [na5]: 青葉の恋心がさりげなく表現
されていて良いです。

「あ、そうだ」

不意に何かを思い出したのか、堀内は右に下げていた鞆の中を漁り始めた。堀内と視線が合いそうになり、慌てて青葉は正面を向いた。

堀内は一枚のチケットを出すと、青葉に差し出した。

「ん」

「……なに、コレ」

「オレが出る大会のチケット。渡すの忘れてた」

そう言うと堀内は青葉にチケットを持たせる。ふーん、と青葉はチケット眺めるが、あることに気づいた。

「え？ でも大会って関係者以外は観覧できないんじゃない？」

「うん。だからオレが個人で取った」

「私のために？」

「うん」

暫しの間が空く。そして信号が青になった。

「お、青だな」

堀内はさっさと先を行くが、青葉だけはその場に固まってしまった。

堀内が自分の為だけに、有料のチケットを取ってくれた。これは一体どういうことなのか。友人としてなのか、それとももっと特別な……。

そう考えるだけで頬が赤くなる。友人だ。友人としてだと思いたい。

けれど、そうじゃないと思う自分がいるのも確かだった。

「ああ、もう！」

青葉は髪を掻きむしり、堀内の後を追いかけた。

基礎編課題⑧

【名前：】

ガイドをはじめとする状況描写を丁寧に書くことを前提に、1200文字程度の文章を書きましょう。
シチュエーション「喧嘩した後の気まずい再会をする二人」

「あ」

「あ」

全く同じタイミングで、全く同じ言葉が漏れる。声のトーンは秋穂の方がいくらか低かった。

「え、勇人さん。おひさー」

秋穂の隣にいた美月が声をかける。勇人は軽く頷いただけだ。

平日の昼間のショッピングモールだからと油断していた。地元とはいえ遊べる場所。他にもある。だから秋穂は美月の誘いにのった。

それなのに、今もつとも会いたくない男に会ってしまうとは。

「勇人も面白い物？」

「……サックスのリード、買いな」

「え？ てことはライブ近いの？」

心臓が跳ね上がる。秋穂はただ下を向いていた。

「ライブあんの？ 言ってよー、秋穂。見に行くのに」

パシパシと背を叩かれる秋穂だが、何も言えない。言いたくない。

まさに一昨日、そのライブのことで勇人と大喧嘩をしたなんて。

秋穂が黙っていると、勇人が口を挟んだ。

「——いや、ライブじゃない。ただの趣味だ」

淡々とした声。特になにもなく、普通の声だ。

けれど秋穂の心にそれは深く刺さった。勇人はこんな喋り方をしていたか、と。

「あ、そうなんだ。えー、残念」

「すまん」

「いやいや、謝ることじゃないって。アタシが勝手に勘違いしていただけなんだから」

へへ、と申し訳なさに美月は笑う。秋穂はただ冷や汗を流す。

「もういいか。この後も予定があるんだ」

コメントの追加 [na2]: 誰と誰の会話かわかるようにしましょう。

コメントの追加 [na3]: 声に関する表現が「淡々」と「普通」の2つあります。繰り返しの印象があるので、別の部分を表現したいです。例えば態度や表情など。

コメントの追加 [na1]: この情報をもっと早く出したいです。そうでないと冒頭ではそもそもキャラクターが3人いることの把握もままならないためです。

コメントの追加 [na4]: この弱みや愚痴に対して、秋穂はどう思ったのでしょうか？ 同意するのか、反発するのかわか秋穂の行動に対する読者の印象も変わります。

コメントの追加 [na5]: 冷静さを欠いており、秋穂にとってバンドがどれだけ大事なものなのかが伺える良い文章です。

「あ、そうだよね。ごめん、引き留めて」

「いや。……じゃあ」

そう言うとも人は美月の横を通り、スタスタと歩いていく。そのままどこかへと行ってしまった

結局、秋穂は何も言えなかった。どう声をかけるべきなのかも、どう反応をすればよかったのかも分からない。ただ、この場合は美月に感謝するしかなかった。

「秋穂。どうかした？」

美月が心配そうに秋穂の顔を覗く。ビー玉のように丸々とした瞳では、秋穂の様子がおかしいことを察している様子はなかった。

「あー……。うん、ダイジョウブ。大丈夫、ありがとう」

「そう？ ならいいけど。それにしても、勇人もこちら辺に来るんだね」

「楽器屋あるからね」

ショッピングモールの楽器屋ならモールのポイントがつくし、安売りをしている時がある。だから秋穂もよく勇人ときていた。

一昨日の夜に勇人から電話がかかってきた。それはバンドに限界を感じているといった内容で、普段の勇人なら言わないような弱みや愚痴ばかりだった。

驚いた。勇人がそんなことを言うなんて。バンドをやるうと言ったのはどこのどいつだ。

そう思うと止められず、気づけば秋穂も強く言い返していた。怒鳴り、傷つけ、傷つけられ、最後にどうやって電話を切ったのかも覚えていない。でも、あの夜はだいぶ泣いた。

けれどそれを聞く勇氣は、今の秋穂にはなかった。

「美月、行こ」

「あ、うん」

「どこ行きたいんだっけ。クレープ？」

「じゃなくて服屋。秋穂は本当に食べ物の話ばかり」

美月が笑う。それに釣られるようにして秋穂も笑う。ただどその心には僅かな影がかかっていた。

基礎編課題⑨

【名前】

一人称あるいは三人称あるいは三一混じり文で1200文字程度の文章を書きましょう。
シチュエーション「路地裏で喧嘩をふっかけられる」

「お兄さん、一人？」

ふっと目の前が陰り、スマホから視線を上げる。見るとガタイの良い男が二人いた。筋肉質、チャライピアス、煙草で黄色くなった歯。なるほど、良い印象はない。

「何の用ですか？」

輝は敢えて刺激しないよう、にこやかに話しかける。拒否すればその分、相手は調子にのって面倒くさいことになるから。

「いや、こんな路地裏に一人て」

「路地裏？」

辺りをきよろきよろと見渡す。ビル壁に挟まれた狭い道に、下品なスプレーアートが書かれる。ようやく輝は自分が迷子だと気づいた。

「あれまあ、ボクが迷子ですか」

「まい……？ いや、そんなことどうでもいいんだわ。はい」

一人の男が手を差し出す。その意味が分からず、輝は首を傾げた。

「手になにかあるんですか？」

「いや、わっかんねーの？ 通行料だよ」

「俺らの縄張りに入ったのはアンタだからね？」

縄張り、と言われて輝は純粹に疑問を浮かべた。

いつからここは野生動物のたまり場になったのだろうか。強さをさらけ出し、大した大義も正義もないまま群れる、この男たちは何なのだろう。

ふむ、と輝は少し考える。

のしてしまうことは楽勝なんですけどねえ。けれどそれではパートナーに怒られてしまう。はてさてどうしたものか。

「なに黙ってんだよ」

痺れを切らした男が輝の胸倉をつかみ、低く唸る。犬歯をわざと見せているようだが、加工されたまがい物の犬歯など怖くもない。

コメントの追加 [na3]: 縄張りに対する「野生動物」の表現は馬鹿にしつつも適切で良いです。

コメントの追加 [na1]: 中途半端に切れているように見えます。「そっちこそこんな路地裏に一人で何の用だ？」とまで入れましょう。

コメントの追加 [na2]: ずっとスマホを見ていて周囲を確認していなかったということでしょうか？ 状況が読者に伝わるように描写を補強したいです。

そう思うとなぜかイラっとした。ただ単純に気に喰わない。

「はーーーーー……」

「あ？」

表情は笑顔。それはもう不気味に見えるくらい。そして、輝は差し出された手を握る。主に人差し指を。

そして、何の躊躇もなく**輝は指をねじって折った。**

「ッあ、だあああああああ！」

悲痛な叫び声をあげ、男が青紫色に変わっていく指を抑えて倒れる。隣にいた男は何が起こったのか分からないといった表情だ。

「面倒くさいんですよ。そういうの」

「お前、何をして！」

「あーーーーー、うるさいです。殺しますよ。てか殺されたいんですか？」

光が入らない濁った瞳で睨んでやれば、残った男はすぐさま黙る。

こんな簡単なことで引いてくれるなら、すぐにやればよかった。

「ニホンで人殺しはダメだから、もめ事は起こしたくなかったんですが、このくらいなら良いですよね」

輝はスマホを起動させ、途中だったアプリゲームを再開させる。倒れている男はまたぎ、先へと進んだ。

「待てよ！ まだ話は」

「終わりましたよ。貴方がたは殺されなかった。ボクは道を通る。それでいいじゃないですか」

それとも、と輝は男の方を見た。

「マジで殺しますよ」

中々、この国は面倒くさい。

コメントの追加 [na4]: 輝の表情でしょうか？ ややわかりにくいので主語を入れましょう。

コメントの追加 [na5]: この主語はなくても誰の行動かわかりますので、省略しましょう。

コメントの追加 [na6]: 心の声だけになっているので描写の補足があると良いです。または男の反応を書いてもいいでしょう。

基礎編課題⑩

【名前…】

2000 文字程度の文章を書きましょう。
シチュエーション「これまでの課題で書いてきたキャラクターたちがピンチに陥っているシーン」

幼き頃の自分がいた。周りの顔色ばかりを伺って、自分の意志も意見も何もない自分が成長していく。

小学生も、中学生も高校生の自分も一緒だ。何も変わらず心は幼い。そんな自分が嫌になっていく。

ぼんやりと浮かぶ自分の思い出に、律は顔を覆った。そもそもここはどこだろう。闇の中をユラユラ、ユラユラと彷徨っている感覚だけがある。体は浮いているのか。しかしそんなことはどうでもいいのだろう。だって私は――。

――あれ？

――わたシのナマえはなンダっけ？

「律！」

切羽詰まった声がして、律はハッと目を開けた。心なしか、瞳がいつもより熱い気がする。

「律！ 目を覚ましてください！」

「……輝？」

「ああ、良かった……！」

涙を浮かべ、輝は膝から崩れ落ちる。気づくと見慣れない石の天井が見えた。

「私……？」

「覚えてないんですか？ 突然この迷宮に入ったら気を失ったんですよ。どれほど心配したか……」

「迷宮……」

そうだ。ここには調査に来たんだった。

コメントの追加 [na4]: なんの調査でしょうか？ キャクターの状況をもう少し説明しましょう。

コメントの追加 [na1]: どこにいるのでしょうか？ 続く文章を見るに、この一文は適切ではないと思われます。
「幼いころの自分は周りの顔色ばかり伺っていた。自分の意志も意見もなにもなく、成長しても変わらない」

コメントの追加 [na3]: この「突然」は「気を失った」にかかりますが、読み方によっては「突然迷宮に入る」とも取れます。
「この迷宮に入ったら突然気を失ったんですよ」としましょう。

コメントの追加 [na2]: 前の文章と同じことの繰り返しになっています。
「心が幼いままの自分が嫌になっていく」とするといいでしょう。

コメントの追加 [na5]: 声ではなく地鳴りだと認識してしまいます。声が出た後に地鳴りがしたと描写しましょう。

律はゆっくりと体を起こす。まだ目眩がするが、状況を把握することなら出来る。周囲に人の気配はなく、ただ静かな石の神殿が広がる。ところどころにヒビがあつて今にも崩れそうだ。

「大丈夫ですか、律」

「え？」

「眠っていたとき、泣いていましたから」

そう言われ、自分の頬を撫でる。僅かだが涙の痕があり、目も些か腫れていた。

「涙……」

自分が見ていた夢を、糸が解れていくかのように思い出す。そうして思い出した。弱い自分を見た。この先に不安しかないような、そんな夢を。

「私——」

「律」

輝が律の手を握り、優しく包み込む。普段はゲームのやりすぎで冷たく、カサカサな手なのに今はとても暖かい。

「辛いときは、辛いでいいんですよ」

その言葉がしつとりと律の心に響く。律は唇を噛みしめ、何かを言おうとした時だった。

——オオオオオオオオッ！

「！」

「今のは!？」

地鳴りのような音がして、迷宮が振動で揺れる。輝は律を庇うように上に覆いかぶさった。

「律！ 怪我は！」

「ない。けど、これって」

音かとも思ったが、これは声だ。グラグラと揺れる中で、律はその声に聴覚を集中させた。

「崩れそうです……!! 律！ 立てますか！」

天井からも細かな瓦礫が落ちてきて、時間が経てばあつという間に生き埋めになりそうだ。

輝は律の腕を取った。

「立てる」

「なら良いです。走ります！」

コメントの追加 [na6]: 臨場感のある良い表現です。

輝を先頭に、二人は迷宮の出口へと向かう。光の届かない冷たい床を、二人の足音が反響した。

出口へと向かう途中、律はずっとあの声が気になっていた。叫び声、怒り、興奮、ぐちゃぐちゃな感情が入り乱れていて、聞くのも辛くなる。

そしてどうしてこんなにも寂しい気持ちになるのか。

「ねえ、輝」

「何ですか！ 話している余裕はないんで——」

「私、残る」

「え？」

輝が振り向くよりも早く、律は駆けだしていた。来た道はまだ瓦礫で塞がっていない。

「律！ 戻ってください！ 律！」

「ごめん！ でも行かなきゃ！」

「行くってどこに！」

ピシ、と天井に亀裂が入る。そして律は叫んだ。

「声のする方よ！」

刹那、天井が割れて輝の目の前に瓦礫が落ちる。退路が断たれ、亀裂は律の頭上まで広がっていく。天井は崩落の一途をたどり始めていた。

「律！ りつー！——！！」

輝の声に押されるように、律は走った。天井の亀裂がその後を追いかける。そして細かな瓦礫も落ち始めた。

「邪魔！」

落ちてくる瓦礫を避け、時には止まって落ちるタイミングを見計らう。小柄な体はよく小回りが利き、大した怪我もなく進むことができた。

ガラガラとうるさい石の音が響くが、律はあの声にだけ意識を集中させる。湿った空気が体にまとわりつき、汗で服はじっとりとしていた。

それでも走る。ここで止まれば後悔するぞと体が叫ぶから。

だがその時、何の前触れもなく頭上に落石が当たった。

「ツッ！」

視界が一気に歪み、二歩、三歩とよろける。生暖かい何か頬を伝い、脳に電流が走ったかのような痛みがあった。

——こんなところで、

「死んでたまるか！」

倒れ込む一歩手前で律は踏み止まり、ぐんと頭を上げた。

流されてばかりの自分にサヨナラを。誰も助けようとしなかった自分にサヨナラを。そしてこれからの私は、もう誰も見捨てない。

時間が経つのも忘れ、律はとにかく声の主を探した。似たようなフロアが多く、声の主どころか生物すら見当たらない。

「なんでよ……！」

この迷宮が崩落するのは時間の問題だ。そうすれば必ず自分は生き埋めになる。

「どこにいるのよー！」

律は叫ぶ。だがそれに応えてくれる者はいなかった。